

■□要旨■□

1. 講師経歴

本田技研研究所入社後、周囲から大きな反対を受けながらも16年間研究を続けて、日本で初めてエアバッグの商品化に成功した。現在は、企業・大学で講演し、イノベーション創造のやり方を伝えている。

2. イノベーション

イノベーションとは、論理的に理解できるモノではない。そうでなければ、世の中にはもっとイノベーションに溢れている。従って、論理判断力の高い優秀な人や、過去の経験・知識に引きずられる40歳を超えた人がイノベーションを起こすのは難しい。

3. 40歳を超えた人の役割

イノベーションは自分で起こさず、若い人に任せる。しかし、ただ任せるのではなく、コンセプトを捉えているかを判断してやる。そして、辛抱強く失敗を許容しながらも、どんどんアイデアを出させて、自分もそのアイデアに対して熟慮した質の高い質問を出して、さらに考えさせて若い人を鍛え、本質を捉えた数少ないアイデアを拾い上げる。

4. コンセプトをひねり出す下地

コンセプトとは、ユニークな視点で捉えたモノ事の本質である。企業としては、お客様が違いを感じ、期待を超える価値創りを行わなければならない。普段から感受性を豊かにして、一流のモノを体感する、自分とは異なる人と本質的な議論をすることが、そういうコンセプトを生み出せる下地となる。

5. 最後は「想い」

イノベーションと言われるような大きな違いを生み出すには、何かをやればうまくいくような方程式はないが、イノベーションを起こす人は皆、何かしらの熱い想いを持っている。

■□今回の学び ひとことという■□

本質を考えずに仕事をすることは、羅針盤の無い船で航行するも同じ。本質を突き詰めることで、ブレない自分の基準軸を作り、周囲の納得性を高め、仕事の価値を高める。自分はもう40歳ですが、いくつになってもイノベーションを起こす事が無理だと考える必要はないと思います。「変える」という気持ちを日々持って、仕事・生活に向かいたいと思います。



■□感想■□「自分は口が悪い」と事前に仰ってましたが、「ばかやろう」や「くだらねえ」を連発。しかし、その言葉の理由がまさに本質についており、「小気味よくダメを斬る」という感じで楽しみながら、大変多くの示唆を頂いた講義となりました。